

小笠原村教育委員会教育長
上原 一夫 様

小笠原村立母島小中学校長
井口 寛隆
(公印省略)

令和 6 年度 小笠原村立母島小中学校 学校評価の結果等に関する報告

標記の件について、下記のとおり報告します。

記

1 本校の教育目標及び教育目標を達成するための基本方針

【教育目標】

母島を誇りに思い、共によりよい社会を築くことのできる人間を目指し、自ら困難を乗り越え、思いやりをもって心豊かにたくましく生きる児童・生徒の育成を図る。

一. 意欲的に学ぶ児童・生徒 一. 自らきたえる児童・生徒 一. 社会のために尽くす児童・生徒

【基本方針】

教育目標を達成するために、「確かな学力」「豊かな人間性」「健やかな体・安全」を基礎となるものとして設定する。その基礎を元に築きあげていくものとして「常識」「学年(学級)の力」「心の交流」を大切にする。更に基礎を支えるもの(土台)として「地域との相互連携」「組織的・計画的・円滑な学校運営」「信頼される教職員」の充実を図っていく。

2 今年度の学校経営方針において重点課題として設定した項目及びその実績

【重点課題として設定した項目】

・『確かな学力』

児童・生徒に自ら学び自ら考える力等の「生きる力」を育むため、「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な習得を図るとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力」を育成する。

・『豊かな人間性』

教師と児童・生徒、児童・生徒相互の人間関係を深めるとともに、家庭や地域との連携を図りながら、生徒の内面に根ざした道徳性の育成を図る。

・『健やかな体・安全』

体力テストの結果分析を踏まえ、児童・生徒の運動への関心を高めるとともに、体力向上に関わる学校全体の課題や各生徒の課題の解決に取り組む。

【実績】

・『確かな学力』

小学校では、小笠原村学力調査における国語科において、3～5年生の正答率の値が全国平均を下回っている。全体的に「書くこと」の領域の正答率が低く、特に、3年生と5年生は、「書くこと」の領域の正答率が標準得点と比べると大きく下回っている。また、今年度は全体的に「情報の扱い方に関する事項」の領域の正答率が低い。問題の意図を読み取る力が書くことへ影響していると考えられる。他教科においても短文で答えるような記述式問題の正答率は、顕著に低い傾向があ

る。「読むこと」と「書くこと」については全学年における喫緊の課題であると言える。

中学校では、小笠原村学力調査における全国との比較によると、5教科の標準スコアにおいて、1年生 58.8 (最大値 62.4、最小値 55.2)、2年生 51.8 (最大値 62、最小値 43.6)、3年生 47.3 (最大値 55.9、最小値 41.) と概ね全国と同等レベルの基礎学力であるといえる。ただし、最大値、最小値を見ても分かるように小集団が故に個人の成績が大きく影響を及ぼしている結果である。この結果からすると、まだまだベーシックタイムの取り組みなどが「確かな学力」につながっていない生徒もいる状況である。また、2年間研究を続けてきた「表現する力の向上」がどのように「確かな学力」につながっていくのかを検証する必要がある。ただ、今年度は特に定期考査前を中心に放課後の自主学習に取り組む生徒が増えてきたので、その成果が来年度現れるかも検証していく。

・『豊かな人間性』

各学年、計画的に「特別の教科 道徳」の授業を進めている。小学校では、年間指導計画に基づき毎週の指導内容・方法を検討・修正している。中学校では、学年の教員が輪番で担当することで、様々な方法で道徳的实践につなげるような授業を展開している。ただ、毎年のことではあるが、人数が少ないことや、様々な経験が少ないので多様な考えを出させることには課題がある。また、道徳授業地区公開講座では多くの保護者、地域の方にも参観していただき、「毎日生活している中で、授業内容と同じような場面もあると思うので、自分の行動を考えるきっかけになると思います」「今の彼らに必要な内容だったと思うので良かったと思う。授業での学びを自分の事と捉えて身につけていけば良いと思う。」など肯定的な意見をもらうことができた。来年度はさらに保護者も参加できるように工夫をして、家庭を巻き込んだ道徳性の向上を目指す。

・『健やかな体・安全』

小学校では、令和6年度体力テスト意識調査から、「体育は楽しいと思いますか」に対して、思う、やや思うと肯定的な回答した児童は100%であった。「あなたにとって運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツはたいせつですか・好きですか」に対して96%の児童が肯定的な回答をした。日頃から体を動かすことが好きな児童ではあるが、今年度は酷暑で休み時間に校庭・体育館で遊ぶことが困難な日が多くあった。次年度は室内で遊べる機会を委員会活動でも企画し、全校児童の運動の機会を増やしていく。

今年度、本校生徒の体力テストC評価以上出現率を見ると92.3%(男子80%、女子100%)という結果であった。令和5年度全国のC評価以上出現率が73.7%(男子66.8%、女子80.6%)であることから見ても高い数字である。これは、東京都調査において1週間の運動習慣が420分以上の生徒割合が59.6%(男子68.7%、女子50.5%)だったのに対して、本校生徒の割合が92.3%だったことからわかるように、日頃から運動に親しむ習慣がある結果だと考えられる。ただ、小集団が故に個人の記録が大きく影響を及ぼしている結果である。今後、個人個人が体力テストの結果を踏まえ、自分自身に合ったトレーニングを実施できるよう支援していく。

3 関係者評価の概要

・学校評価アンケートは経年変化を見るため、平成28年度からほぼ同じ内容16項目(ただし、項目数は対象者によって変わる)、5件法で11月に実施した。今年度のアンケート回答数は「地域協力者(14項目)4名」「中学校教員(16項目)10名」「小学校教員(16項目)9名」「中学校保護者(16項目)12家庭」「小学校保護者(16項目)19家庭」「5年生以上児童(10項目)10名」「生徒(10項目)12名」。回収率は「地域協力者50%」「中学校教員100%」「小学校教員100%」「中学校保護者92.3%」「小学校保護者95%」「5年生以上児童100%」「生徒92.3%」だった。

・全ての項目において小中保護者の肯定率が81%を超え、概ね肯定的に評価されていると考える。

・学校評価アンケートにおいて小中保護者の合計肯定率が最も高かった質問は「授業参観する機会が十分にあり、学校の様子を知ることができる」「学校施設を地域に開放し、有効に活用されているか」

であり、ともに 100%を示している。続いて「基礎的・基本的な知識・技能を習得ができるような授業が展開されているか」であり、97.4%(中学校 100%小学校 94.7%)を示している。これは「常に学校公開」を基本としていることにより、気軽に授業参観をできるようにし、少人数に合わせた個別最適な学習を進めていることが理解された結果と考える。

・学校評価アンケートにおいて小中保護者の合計否定率が最も高かった質問は「小中学校間の連携を生かした小中一体の取り組みが進められているか」であり、小学校 15.8%、中学校 8.3%であった。これは来年度より義務教育学校化していくうえで大きな課題だととらえ、今行っている小中一貫教育を理解してもらう必要がある。そのためにも保護者を含めた地域懇談会を開催し、学校の実践を広く周知していく。

・学校評価アンケートにおいて小中保護者で最も評価が分かれた質問は「保護者や地域のニーズに応えた学校運営を行っているか」であり、小学校 63.3%、中学校 100%であった。これは発達の段階によってニーズの高さに違いがあることが考えられる。義務教育学校になるにあたって、より丁寧な学校方針の伝達と、地域、保護者からの意見の聞き取りが大切だと考える。

4 本年度の取組内容及び自己評価

	本年度の 重点目標	具体的な取組内容	取組内容の自己評価
取組①	「基礎的・基本的な知識・技能」の習得	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の打ち合わせ時間を極力減らし、登校後すぐに各担当が児童と接する時間を確保している。週2日程度、登校後の10分間のベーシックタイムを活用し、各学級担当が学習課題を提示し、学習を進めている。(小学校) ・週2日程度、登校後の10分間をベーシックタイムとして5教科の教員が輪番で回り、学習課題を提案し学習を進めている。特に今年度より英語科では単にプリントに取り組ませるだけでなく、解説をするようにした。(中学校) ・小笠原村教育委員会研究指定校として「表現する力」について研究を進めている。また、日頃から少人数の特性を生かし、1人1人の授業中の発言回数を増やすことで、自らの考えを表現する力の向上に役立っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年の特性、個人の課題に合わせた設定をしているが、中学年以降の定着を向上させる必要がある。レディネステストで得た情報を基に授業内での既習事項の確認を今後も確実に継続していく。 ・生徒の集中している姿が見られ、全国学力調査の結果から見ても特定の個人においては一定の成果が出ていると考える。ただ、個人個人課題が異なるため、今後それぞれに合った課題が提供できるようにしていく。 ・2年間の研究を終え、生徒の授業振り返りやワークシート等から見取ると多くの生徒の「表現する力」が向上したと考える。また、プレゼンテーションソフト等を使った「表現する力」も向上したと考える。今後、この取り組みがどう『「基礎的・基本的な知識・技能」の定着』につながったのか検証が必要。

<p>取組②</p>	<p>豊かな人間性 道徳教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童との人間関係を深めるため、年3回の生活アンケートを行うとともに、担任との2者面談を行っている。 ・「規則やルールの順守の指導」について共通理解を図るために中学校部会において「生徒指導提要」を改めて確認するとともに、本校にあった校則について確認を行った。 ・今年度も道徳の授業では学年内で教員が輪番で指導に関わることに、多面的・多角的に考えさせる授業を展開した。また、道徳授業地区公開講座についても参加保護者が増えるよう時間割の工夫などを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活アンケートの内容を基に面談を行うことで、児童の抱える問題にいち早く対応することができた。学校評価アンケートでは、保護者の理解を得ることが不十分なこともあり、積極的な広報を継続していく。 ・「生徒指導提要」を確認することにより、「発達支持的生徒指導」の重要性を再確認することができた。その結果、学校評価における『子供たちの行動や生活態度に対して、適切な指導が行われていると思いますか。』の質問について肯定的な意見 100%に繋がったと考える。 ・指導内容は基より、指導者が変わることで展開の仕方も変わり、より多面的・多角的に考えさせる授業を行うことができた。道徳授業地区公開講座についても参加者が増加した。来年度はさらに改善していく予定。
<p>取組③</p>	<p>健やかな体・安全</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体力テストの学校全体結果を見ると、持久走の全国Tスコアがあまり良くなかった。少人数学校なため、1人の評価が大きく全体の評価に影響している可能性が高いが、それを改善するため、校内研究も兼ねながら12月に行われるロードレース大会の練習時から自分に合った目安を設定させるとともに、お互いに声掛けを行うことで所属感、貢献感をもたせることで意欲的に取り組ませる授業を展開した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロードレース大会の個人成績から見ると自己ベストを更新、または昨年度の記録を大きく上回る生徒が数多くいた。また、態度からも意欲的に取り組む姿が多くみられ、個人目当ての作成、お互いの声掛けは成果があったと考える。

5 次年度の学校経営において重点的に取り組むべきと認識する課題

・義務教育学校移行に関する準備

令和7年度から義務教育学校に移行するにあたって、各分掌、特設委員会、小・中部会等で必要な変化について考えていく。その内容について準備委員会で検討し、教職員の共通理解を大切にしながら移行を進めていく。また地域懇談会を定期的を開催し、地域・保護者等の意見を聞くとともに、学校の方向性を伝えながら進めていく。

・信頼される学校

ここ2年間はサービス事故0を達成し、サービス事故に関する地域からの信頼は取り戻しつつある。ただ、全国的にサービス事故が増加していることを踏まえ、今後も毎月東京都から届くサービスレター及びサービス事故報告を回覧し周知するとともに、小中学校別の部会で管理職によるサービス研修を行う。

また、授業、学校行事等の公開を積極的に行い、教育活動について保護者・地域住民等に理解を深めていただくとともに、計画的に地域諸活動に参加することで地域との相互連携・協力を密にし、外から見える学校づくりを推進することで信頼される学校にする。

*本報告書各項目の記載内容は、次年度の教育課程及び学校経営方針等学校経営に係る各種資料へ反映いたします。